

# JAF AE Newsletter

No. 12 (Feb 2003)



## 第 1 2 回 全 国 大 会 、 天 理 大 学 に て 開 催

日時：2002年11月30日(土)  
10:00~17:45

### 大 会 を ふ り か え っ て

徳地慎二(宮崎産業経営大学)

第12回全国大会は大阪大学・日野信行氏の「『国際英語』研究の体系化に向けて：日本の英語教育の視点から」という特別講演から始まった。日野信行氏は、従来の国際英語研究では、全体における個々の研究成果の位置付けが欠如しており、総合的な体系を欠いていると指摘して、国際英語研究の総合的パラダイム構築が不可欠であることを提案された。

その後、シンポジウム「アジア英語の研究報告多様な取り組み」が行われた。まず、大原始子氏からの趣旨説明の後、末延岑生氏が「『Errorology 学』の構築に向けて 外国語教育の観点からの二ホン英語への取り組み」という発題を行い、言葉を習得するには、間違いを恐れないことが大切であり、間違いを容認する学習環境の整備が重要であることを指摘された。

次に、後藤田遊子氏が「モンゴルの英語教育 フィールドワークを主とした調査研究」という題でモンゴルの英語教育の実態、モンゴルの特殊な言語事情、モンゴルの英語教育機関や組織の実態、また聞き取り調査の具体的内容について発題をされた。

最後に、久保田信一氏が「アジアの英語辞典から見たアジア英語の差異と共通性」について発題された。その際、アジア英語辞書比較から導き出された英語変種間の差異や共通性について意味の拡大、文法項目等を具体例として考察が加えられた。

午後の研究発表は、仲潔氏の“‘English/ 英語’ and the Discourses of English Language Imperialism in Current ELT Textbooks in Japan”から始まった。発表では、中学生の言語観形成における教科書と言説との結びつきを明らかにするために中学校英語教科書において‘English/ 英語’がどのような言説と結びついているかが分析され、結果として、‘English/ 英語’に関しては、多様な言語観を提供しているとは言い難いことが指摘された。

次に松田岳士、三宅ひろ子、梨本篤司、本名信行の4氏が「World Englishes を主題にしたインターネットによる大学院授業コンテンツの国際協同開発をめざして」というタイトルの発表を行った。その際、物理的要因に影響をうけないインターネットを媒体とした分散型セルフラーニングがこれからの教育に

### プ ロ グ ラ ム

大会総合司会：加藤三保子(豊橋技術科学大学)  
10:00 開会の辞：太田耕軌(天理大学)  
会長挨拶：本名信行(青山学院大学)  
10:10 - 11:40 特別講演：日野信行(大阪大学)  
「『国際英語』研究の体系化に向けて：日本の英語教育の視点から」  
11:40 - 12:00 会員総会  
12:00 - 13:30 昼食休憩  
13:30 - 15:30 シンポジウム  
テーマ：「アジア英語の研究方法 多様な取り組み」  
司会：大原始子(桃山学院大学)  
発題：末延岑生(神戸商科大学)  
「『Errorology 学』の構築に向けて 外国語教育の観点からの二ホン英語への取り組み」  
後藤田遊子(北陸学院短期大学)  
「モンゴルの英語教育 フィールドワークを主とした調査研究」  
久保田信一(東洋英和女学院大学)  
「アジアの英語辞典から見たアジア英語の差異と共通性」



<シンポジウムの一場面>

15:45 - 17:45 研究発表 司会：吉川寛(中京大学)  
1. “‘English/ 英語’ and the Discourses of English Language Imperialism in Current ELT Textbooks in Japan”  
仲潔(大阪大学)  
2. 「World Englishes を主題にしたインターネットによる大学院授業コンテンツの国際協同開発をめざして」  
松田岳士、三宅ひろ子、梨本篤司、本名信行(青山学院大学)  
3. “The Creation of ‘Chineseness’ in Ha Jin’s *Waiting*”  
Shi, Jie(国際基督教大学)  
4. 「アンケート調査に見るフィリピン若者の言語観・言語意識」小野原信善(香川大学)  
閉会の辞：徳地慎二(宮崎産業経営大学)

は不可欠であるとの指摘の後に、開発の目的や開発過程の詳細について説明がなされた。

次に、Jie Shi 氏が“The Creation of ‘Chineseness’ in Ha Jin’s *Waiting*”というタイトルで発表された。発表では、Ha Jin の文体の中に、中国語の背景にある中国人らしさや中国語をとりまく談話環境の特徴を反映した新しい言語基準が英語で書かれた彼の作品の中に作り出されていることを論じられた。

最後に小野原信善氏が「アンケート調査に見るフィリピン若者の言語観・言語意識」で発表を行った。発表では、アンケート調査の結果から、1974年に施行されたバイリンガル政策がいかに機能しているかについて説明がなされた。

本大会では特にシンポジウムで末延岑生氏がお話になった「間違いを容認する学習環境の整備が重要である」とのご指摘が心に響いた。英語が我々日本人にとって外国語である以上、間違いをすることを恐れるのではなく、むしろ間違いを容認し、そこから間違いを少なくする姿勢を持てるかどうかが大事なのである。その意味で、我々英語を教える立場の人間が果たすべき役割はこれから極めて重要になってくる。同時に、日本「アジア英語」学会が英語教育においてより積極的な役割を果たすべき段階になってきていることを強く感じた大会であった。

## 特別講演レビュー

### 「国際英語」研究の体系化に向けて 日本の英語教育の視点から

榎本吉雄（天理大学）

日野氏の講演は、国際英語と私、「国際英語」研究の体系化、国際英語の研究課題の例、国際英語の授業実践の4項目から成り、実に詳しく豊富な資料にもとづき、また自らの体験を通して語られた。

まず、氏は「国際英語」（以下 EIL）とはその母語話者（あるいはアングロ・アメリカン）の言語的・文化的枠組を超えた英語と定義する。

次に、EIL の体系化への試論として、まず現在の EIL 研究には総合的な体系が欠如しているため、多くの優れた研究がなされてきたにも拘わらず、その成果が生かされていない。この現状を打破すべく EIL 研究の統合的枠組を再構築することを提案されている。具体的には EIL 研究の大枠を、TEIL（EIL と同義で教育に重点をおけば TEIL）の定義づけと、TEIL の実践という2つの柱に求めておられる。

EIL とは、自分の価値観を表現できるような英語であり、またさまざまな英語を理解できるようになること、という立場を強調された。ここから重要な研究課題の1つが生まれてくる。すなわち EIL とは脱英米化であるとするならば、EIL のモデルをどこに求

めてカリキュラムを組み立てるのか。教材作成の例として、EIL 教材の文化的内容は英米に限定されない。すなわち受信型技能においては、できるだけ多様な文化を扱うことが望ましく、発信型技能のためには自己の文化に重点を置くべきとする。そして EIL 教材の言語のルールは英米式に限定されないこと。つまり受信型技能では、できるだけ多様なルールを体現するさまざまな英語（varieties）を素材とすることが望ましく、発信型技能では自己の価値観を伝達できる英語を目標とすべきとする。

これに関連して WE 論の実態は英米を中心とする Inner Circle、Outer Circle、Expanding Circle（氏はこれについて親藩、譜代、外様と見事な訳語を披露された）の中で Inner Circle と Outer Circle は WE の中に入っても日本や韓国のような Expanding Circle の英語は問題にされていないという。

では EIL ではモデルをどこに求めるか。氏は矢野、Quirk、Jenkins らの提案に言及され、L. Smith の intelligibility、comprehensibility、interpretability の概念に触れながら Jenkins 案をたたき台として発音のモデルとして出発することを提案された。私はこれに日本語教育（JIL）の視点から眺めてみることを提案してみたい。私の勤務校には東南アジアからの留学生が多数いる。かれらの話す日本語は教科書で学んだ日本語である。なまりはあるが、よく通じる。私は留学生と話するときには、日本人にしか分からないような表現は差し控える。私の母語で話しかけてくれるだけで充分である。それに対し最大限の敬意を払うには、教科書式日本語で以て対応することである。

最後に日野氏の授業実践例には驚嘆するばかりであった。

## ナウル共和国のその後

岡村徹（帝塚山学院大学）

2000年、在外研究の機会を得て1年間、豪ニューイングランド大学に行ってきた。国内外の著名な言語学者を迎えての言語学セミナーへの参加は私のような若手の研究者にとってはたいへん有益なものであった。しかし何と云っても時間がたっぷりある中で3度目となるナウル島へのフィールドワークはセミナー以上の興奮をおぼえた。

目的は1940年代に成立したと思われる中間言語としてのニホンゴの可能性を探ることとピジン英語との関連を調べることであった。お年寄りへの聞き取り調査をすすめながら数多くの資料が集まったが、戦後55年を経た今日でもナウル人の記憶としてニホンゴが生きているのが不思議である。中でも「ミービョウキ」ということばにはたいへん興奮した。戦時中、日本軍は島内に3つの滑走路を作るために地元の人々を強制的に働かせた。風邪をひいて

いても怪我をしていても作業を休むことは許されなかった。それでもどうしても休みたくて、自分は病気だから動けないということを日本兵に伝えるために必死になっておぼえた表現である。「ミー」は既存のピジン英語からの借用であると考えられる。ナウル人にはピジン英語および英語の知識がすでにあった。したがって me や you といった代名詞形が日本人との接触の初期の段階で頻繁に使われたとしても不思議ではない。これはフォリナートークに関する仮説としてネウストブニーが指摘したことと合致する。つまり、代名詞の特殊な使用に該当する。ナウル人は日本人が来島する前は中国人との間でピジン英語を使っていたし、中国人との容姿が似ている日本人と接触したときに、とっさにナウル人の口から出たとしても不思議ではない。

一方、日本人の間では当時、英語が敵性語として位置付けられていたこともあってか、上記の代名詞形が使われた形跡がない。ニューギニア島では日本軍が土地の人から食糧を獲得するための手段としてニューギニアのピジン英語を獲得したという報告があるが、ナウル島ではそのようなことはなかったようである。さらに初期の接触段階で特徴的な命令調の表現が観察されない(例えば「ユー ゴー」とか「ユー カム」のような表現)。

したがって、この二ホンゴはピジン化した二ホンゴと捉えるのではなく、個人的な差異が著しい段階である一種の中間言語と考えた方がよさそうではあるまいか。その他詳しくは追手門学院大学の『オーストラリア研究紀要』第26号をご覧ください。

「言語学者は優秀な歴史学者でなければならない」といったのは言語学者であるギリアン・サンコフである。たしかに、ある特定の時期において当該言語に何が起こったのかを知るには当時の歴史的・社会的背景を知らずには解決できないことが多々ある。そのようなことを思い知らされた1年であった。

## アジアの「おもしろ」英語学習法

### ゴミ収集車と英語(台湾・台南市)

相川真佐夫(和歌山信愛女子短大)

幼い頃、私の住む和歌山市では、ゴミ収集車が来る時、山田耕筰の名曲「赤とんぼ」が流れていたように思う。「ゴミ収集車と音楽」、わたし達はこの組み合わせに、全く違和感を覚え、日々を送っているはずである。台湾も同じく、ゴミ収集車が来る時には大きな音で音楽が流れる。台北市ではその音楽を合図として、みんな一斉に家から大きなゴミ袋をさげて出てくる。そして自分で収集車の中にその袋を投げ入れるのだ。これは毎日、ある地区では1日2回行われる日々のルーティーンである。音楽は「エリーゼのために」や「乙女の祈り」などの名曲。毎日ゴミ収集車が来るお陰で、老若男女を問わず、

誰もがそのメロディーを自然に覚え、口ずさむことさえできるのである。

さて、「誰もが自然に覚え、口ずさむ」、そういう理由で、ゴミ収集車から「英語のフレーズ」を流そうと、一体誰が思い付くであろうか。しかし、そんな奇抜なアイデアが、台湾の古都・台南市でまじめに取り上げられているというからびっくりする。台南市市長・許添財の奥さんのアイデアから提案されたこの「拉土及車説英語：英語が流れるゴミ収集車」は、2002年9月から始まっている。収集車から流れる英語は、例えば、9月の第1週目は「(男の声) How are you? イル好口馬?」「(女の声) Fine, thank you. 很好、謝謝尔。」、第2週目は「(男の声) Good bye. 再見。」「(女の声) See you tomorrow. 明天見。」、12月の第2週目には、「(女の声) Are you hungry? イル餓了口馬?」「(男の声) No, I'm not. 不、我不餓。」、第4週目には、「(男の声) Coffee or tea? イル要口加口非或茶口尼?」「(女の声) Tea, please. 我要茶、謝謝。」など、週替わりメニューとなっている。フレーズは男女1文ずつの簡単な会話で、必ず英語の後には中国語の訳が流れている。

台南市の市長は、アメリカで経済学を専攻し博士号を有する。英語の必要性を自ら体験している市長は、できるだけ多くの庶民に英語を学習させ、国際的センスを育ませようと英語学習のキャンペーンを行っているのである。ゴミ収集車を利用した英語教育、これはまさしく庶民への無料教育サービスと言えよう。ちなみに、台南市は、台湾の中で、教育にかけては一番熱心な自治体と言われており、例えば、他のどの自治体より先駆けて小学校に英語を全面導入したり、独自の教材を開発するなどの教育熱心振りを見せている。

アジアの中には、このような手段で一般庶民に英語学習の環境を整備しているところがあるのだと、ただただ驚くばかりである。果たして、この英語が流れるゴミ収集車、それなりの効果があるのだろうか。また、人々の反応は如何に?

## 新入会員による全国大会の感想

宮奥正道(広島県立本郷工業高校)

日野信行先生の特別講演「『国際英語』研究の体系化に向けて」を聴講してたいへん感動し、高校現場で教える者としてもたいへん考えさせられる講演でした。私が感動した点をいくつか述べてみます。

中学や高校では native speaker の英語の発音をモデルとして教えていると思います。しかし、熱心な教師であればあるほど、力を入れすぎてしまうあまり、生徒の発音が native speaker の発音に極力近づかないといけないと思い込んで指導してしている教員も多いのではないのでしょうか。もちろん生徒が native speaker の発音にあこがれ、それをモデルとして発音

練習することは悪いことではありません。しかし、そのことを全員の生徒に強く押しつけるような形で指導することは、教師として戒めなければなりません。発音であれば、どのくらいの発音であれば、まずまず世界の人々に無理なく伝わるかという視点から、日本人の発音に「折り合う点」を見つけるべきだと思います。その点から言えば、日野先生が改めて紹介された Smith and Rafiqzad の論文(1979)を日本の英語教師は真剣に読んでみるべきだと思います。

先生の講演を聴いていて、ひとつだけ議論を深めてほしいと思ったことがありました。国際英語を「母語話者(あるいはアングロ・アメリカン)の言語的・文化的枠組みを越えた英語」と定義されました。私はこの点には、おおいに賛成したいのですが、それはわれわれが目指すべき理想としての英語であります。現実には存在していないのではないのでしょうか。現在、存在しているのはシンガポール英語であったり、フィリピン英語であったりするのが現実だと思います。それではそれらの英語が国際英語と等しいと言うのは少し無理があると思います。もちろん、それらの英語は国際英語の資質を多く備えているとは思いますが、しかし、それぞれ「英語」という英語を実際に話している者が、そのことを意識しながら、「日野先生が定義されたような国際英語」を求めるべきではないのだろうかと思えます。

\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*JAF AE\*

#### 仲潔(大阪大学大学院)

第12回全国大会は紅葉美しい季節に天理大学で行われた。国際英語研究の体系化、研究方法の多様化、授業コンテンツ開発、意識調査等、その内容及びアプローチは多様であり、研究上の思想と学会のスタンスが合致していると感じた。多様化がもたらす新たな問題と対応策が語られなかったこと、異質さを受け入れない他者とどのように接していくのか等の問題が残るものの、「多様であること」の重要性を改めて認識できる場であったと思う。

## 会 員 に よ る 新 刊

### 『事典アジアの最新英語事情』

本名信行編著 大修館書店 2,500円(税別)

(学会員の相川真佐夫、榎木園鉄也、奥田英樹、奥平章子、河原俊昭、後藤田遊子、末延考生、タイ・ユイ・バオ、田嶋ティナ宏子、竹下裕子、藤田剛正、本名信行、源邦彦、大和洋子、

吉川寛の各氏が執筆)

### 『Languages and Language Policies in Insular Southeast Asia: Focusing on the Philippines and Malaysia』

KAWAHARA Toshiaki, Shumpusha (春風社)

5,950円(税別)

### ・International Communication: English Language Challenges for Malaysia

Saran Kaur Gill, Universiti Putra Malaysia Press

(本書は、日本では販売されておりません。ご希望の方は事務局までご連絡ください)

## 書 評

### 改訂版『シンガポールの言葉と社会: 多言語社会における言語政策』 大原 始子 著 三元社

橋内武(桃山学院大学)

この本は会員の大原始子氏がシンガポールに通い詰めて作り上げた作品である。初版は1997年に上梓されたが、若干書き足して改訂版ができあがった。特に、日本の「英語の第二公用語化」の議論との関係で取り上げられる公用語、国語、国家語、標準語といった社会言語学用語を定義づけたこと(第1章の6)、2002年8月に始まった“Speak good English”キャンペーンの解説をしたこと(第2章)、現代シンガポール英語の語用論的分析を新たに加えたこと(第8章)が、初版との明白な相違点である。

本書を手にしていない読者のために一通り概説を紹介しておこう。序論「シンガポールと言語研究」では研究の課題と方法を示している。11ページの図では、X軸に社会言語学と言語社会学、Y軸にミクロ的分析とマクロ的分析を置いて、4つの象限に分け、以下に取り上げる多角的研究の諸方法を位置付けている。

第1章では、この移民社会に起きてきた史的变化を踏まえながら、その言語的、文化的多様性を論じている。1965年の独立当時に4公用語(英語、マンダリン、マレー語、タミル語)を制定したが、国語のマレー語は儀式での使用に限定される点が面白い。

第2章では、国家形成に向けて行われてきた、民族に対する社会操作がどのようなものであったかを説明している。特に“Speak Mandarin”、“Speak good English”という政府主導のキャンペーンがシンガポールの形成にどのように係わっているかを詳説している。

第3章「教育制度にみる言語政策の変遷」では、この20余年の間に能力別言語教育の導入などにより中華系もマレー系もインド系も英語使用が進み、母語使用が著しく衰退しているとの指摘がなされている。英語は多民族国家を統合するためだけでなく、科学技術とビジネスの言語であるという視点が政策的に推し進められているのである。

第4章「中華系社会とマレー系社会」では、移り住む際の動機と共同体の形の異なり(バンとカンボン)が、社会階層の分割の原因になったと指摘している。対照的で興味深い。

第5章と第6章は、著者が行ったフィールドワークに基づく。インフォーマントの教育世代、社会経済階級、調査地区、言語態度[言語意識]を問うて、そこから“best English”の社会的機能、教育言語の威信に係わる問題、言語維持と言語取り替え、英語のコミュニケーション機能、職業と英語変種の相関関係を導き出している。ここで、「言語取り替え」というのは language shift のことであろうが、「言語移行」としてはどうか。code-switching の訳語と混同する恐れがあるからである。

第7章では、英語のダイグロシア化と現代シンガポール英語を取り上げるが、前者ではシンガポール英語において高変種と低変種を使い分ける傾向があるということである。後者は自然談話資料に基づく“la”の分析に焦点を当てる。

第8章では、言語教育政策とエスニシティの複雑な関係に注目しながら、今後のシンガポール研究の課題を見据えている。あとがきには、執筆の舞台裏が披露されている。

総じて、シンガポール・ウォッチャーとしての著者の長年の研究の蓄積が凝縮した作品である。この改訂版を東南アジアの一言語社会の総合的研究として広く推薦したい。

## 書 評

『世界の言語政策：多言語社会と日本』

河原俊昭 編著 くろしお出版

川畑松晴（金沢学院大学）

本学会員である河原俊昭、松原好次、後藤田遊子、藤田剛正、中尾正史、三好重仁各氏が中心となってタイムリーな書を出版した。いわゆるグローバリゼーションと民族主義化の渦中において、多文化主義及びそれと表裏一体の多言語主義は世界の潮流の一つであり、わが国にとっても無視できない課題となりつつある。

評者は地元のユネスコ協会の一員として、ここ数年ベトナム及びカンボジアでストリートチルドレンとの交流・支援を行なっている。したがってインドシナ3国への関心は強い。また、英語教師として世界の多様な英語にも興味がある。本書はこの程度の「言語政策」の初学者である評者には格好の「入門書」となった。

編著者は「はじめに」で多言語社会の到来は必然であり、「異文化の人間同士の間横たわる深淵に橋を架けようとする試み」である多言語主義こそ、そのような社会の礎となるのではないかとやや情緒的に述べる。厳しい現実を知る編著者の理想主義の現れか？

さて、本書はアメリカ、モンゴル、フィリピン、インドシナ3国、オーストラリア、ニュージーラン

ド、カナダ、イギリス、アフリカ大陸全体、そして南アフリカ共和国の10章から成る。それぞれ章のタイトルやサブタイトルで内容の焦点が明らかにされているのでとても読みやすい。

いくつかの章と副題を書いてみる。

第1章「アメリカの公用語は英語？ - 多言語社会アメリカの言語論争 -」（松原）、第2章「モンゴル国における文字の歴史と民主化後の言語政策」（後藤田）、第3章「フィリピンの国語政策の歴史 - タガログ語からフィリピン語へ -」（河原）、第4章「多民族国家ベトナム、ラオス、カンボジアの言語政策 - 憲法に見るその理念 -」（藤田）、少数民族言語は生き残れるか？ - 多言語国家イギリスの言語政策と言語教育 -」（中尾）、第9章「2000の言語が話される大陸アフリカにおける言語政策概観」（三好）。

各章毎に著者の文体や若干の用語の差異、それに各国研究の角度・視点の違いが窺われ読んでいて面白く感じた。「あとがき」で用語は「必ずしも厳密に統一されていない」とあるが、各章を独立した論文や報告として読んだ評者には各著者の種々の差異が「言語政策研究」の奥行きと広がり示唆するようでむしろプラスとして働いた。また、それぞれ、各国の歴史が言語と関連させて興味深く描かれているので、一般の読者も退屈せずに読めるのではなからうか。大学の「国際理解」や「異文化間コミュニケーション」の授業の課題図書として利用してみたい気がする。また、英語の意外な面を知る上から、中学・高校の英語教師にもぜひ一読をすすめたい。

## アジア研修旅行のお知らせ

河原俊昭（金沢星稜大学）

前号でもお知らせしましたが、今年度はフィリピン訪問を予定しています。日程は3月17日（月）から3月23日（日）までの6泊7日の予定です。マニラを訪れ、市内観光、学校訪問、授業参観、古書店巡りなどを行う予定です。研修旅行のハイライトはデラサール大学の講師によるセミナーです。フィリピンの言語事情、フィリピン英語の特徴、パイリಂಗ教育の実態などについて、講師を囲んでディスカッションを行いたいと考えております。

また、あまり堅苦しい研修旅行にならないようにと、さまざまな息抜きも企画しておりますので、お気軽に参加いただければと思います。常夏の国の夜空の星を眺めながら、サンミゲール・ビールを飲むのは、格別な味がするかと思います。また様々なフィリピン料理や果物を味わうのもフィリピン訪問の楽しみとなります。宿泊先ですが、デラサール大学に近いCentury Park Hotelを予定しています。また、デラサール大学の廉価な宿泊施設(International Center)も利用できます。これらはマニラの中心にあるので、交通の便が良く、マニラを知るには絶好の場所にあ

ります。

旅行の申し込みの締め切りが迫っていますので、関心のある方は、できるだけ早めに担当の河原 (kawahara@seiryu-u.ac.jp)までご連絡ください。皆様と一緒に是非とも有意義で楽しい研修旅行にしたいと思ひます。なお下記の HP に随時内容を更新してゆきますので、こちらもご覧下さい。

<http://www.kiwinet.seiryu-u.ac.jp/kawahara/studytour.htm>

## 編集委員会から

吉川寛 (中京大学)

紀要『アジア英語研究』第 5 号は、今年 6 月の全国大会での刊行を目指して鋭意編集中です。会員の方々には、査読をはじめ色々ご協力をお願いしております。紙面を借りてお礼申し上げます。

11 月 30 日での理事会で、今後 JAF AE 紀要の『アジア英語研究』を販売することが決定されました。会員、非会員を問わず、代金の 2,000 円 (1 冊分、名目は資料代) と送料を事務局宛にお送り下されば購入できます。また、モノグラフも販売中 (創刊号 500 円、第 2 号 600 円) ですのでこちらの方もよろしくお願ひ致します。

## 事務局からのお知らせ

### 第 13 回大会について

第 13 回全国大会は 2003 年 6 月 28 日 (土) に東京の早稲田大学で開催予定です。大会実行委員長は同大学の矢野理事です。研究発表ご希望の方は、締め切り (5 月 9 日金曜日) までに事務局に要旨をお送りください。

### 分科会について

院生や若い研究者の励みになるので、分科会を立ち上げてはどうかと思います。国・地域別、テーマ別など、さまざまな分科会が考えられると思います。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

### 会費について

会費の振り込みを済まされていない方々は、振り込みをお願いいたします。昨年度以前の会費が既納かどうか確かでない方は、会計担当の河原までお問い合わせください。(kawahara@seiryu-u.ac.jp)

## 第 13 回全国大会研究発表者募集

第 12 回全国大会 (2003 年 6 月 28 日 (土)、於東京、早稲田大学) で研究発表を希望される方 (会員に限る) は、要旨 (日・英どちらか) を A 4 用紙 1 枚にまとめて、5 月 9 日 (金) 必着で、電子メール、FAX または郵送にて、事務局 (奥付参照) までお送り下さい。

**CALL FOR PAPERS for the 13<sup>th</sup>**  
**National Conference on June 28, 2003**

## at Waseda University in Tokyo

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Friday, May 9, 2003. Please send it to the JAF AE Secretariat (address below).

## 国際会議情報

### The 6th International Symposium on Applied Linguistics & Language Teaching Beijing - Shanghai

Location: Beijing and/or Shanghai

Date: Oct 7-15, 2003

Call Deadline: 31-May-2003

<http://www.linguistlist.org/issues/13/13-3423.html>

### The 38th RELC International Seminar

TOPIC: Teaching and Assessing Language Proficiency

Date: April 14-16, 2003

Venue: Institute of Public Administration and Management, Civil Service

College, Singapore

For details, contact RELC:

Fax: (65) 6734 2753 E-mail: [admn@relc.org.sg](mailto:admn@relc.org.sg)

### The Twelfth International Symposium and Book Fair on English Teaching

Conference Theme: Curriculum Reform in ELT

Date: November 7-9, 2003

Venue: Chien Tan Overseas Youth Activity Center, Taipei

[http://www.eta.org.tw/eng\\_news/eta\\_welcome/index.html](http://www.eta.org.tw/eng_news/eta_welcome/index.html)

### 第 9 回異文化コミュニケーション研究学会国際大会

Date: 2003 年 7 月 24 日 ~ 28 日

Venue: California State University-Fullerton

本名会長をはじめ、当学会の理事が会員になっている学会です。アジアの英語に関する発表が歓迎されます。どしどし応募してください。

詳細は: <http://www.trinity.edu/org/ics>

<編集後記>

今回は投稿が多かったため「楽しい秋田弁 2」は休ませていただきます。ニューズレターへの投稿を歓迎いたします。エッセイ、情報、書評などをどしどし事務局までお寄せ下さい。

2003年2月3日発行

編集・発行 日本「アジア英語」学会

代表者 本名信行

編集長 榎木蘭鉄也

発行 (有)タナカ企画

事務局 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

百合女子大学 田嶋宏子研究室内

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

学会ホームページ:

<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

年会費振込先: 郵便振替 00280-8-3239

<< JAF AE Secretariat >>

**Professor Hiroko Tina Tajima**

Department of English, Shirayuri College

1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525 JAPAN

FAX: 03-3326-4550 E-mail: tina2@gol.com

JAF AE's homepage: <http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>

JAF AE's postal transfer account number:

00280-8-3239